



副 長 兼 学 長

基礎科学と大学

45年の歴史を持ち原爆の洗礼も受けてきた理論物理学研究所は、宇宙の起源と構造及び物質を支配する究極的自然法則を探求することを目的としている。日常の研究生活においては、枝葉末節の小さな技術的問題にかかわりあっているのが実情ではありますが、時に応じて、上記の大目的を思い起こして方向を見失わない努力も重要と思われる。さて、上記の理論研の研究テーマは基礎科学に属するとよく言われる。ここで基礎科学という意味は、自然科学の基礎的な分野というのみならず、ギリシャ以来の自然哲学の長い流れの中で純粹に知的な興味に従う人間のアクティビティという意味もあるように思う。大学の使命は、言うまでもなく、人類の蓄積された知的資産を次の世代に受け渡していくと同時に、その資産に何がしかの寄与をすることにある。理論研も研究を行うと同時に、理学系研究科に属し、常時十数名の大学院生を抱え教育にも力を注いでいる。いずれにしても日々の経済活動とは無関係と思われる研究テーマに国家が投資し続けてきたのは、このような学問とか教育の歴史に対する自覚と責任に基づいているものと考えられる。国家の高揚期においては、学問とか芸術が栄えるとよく言われる。しかし、考えてみると、本当の意味での知的な活動は、経済的な繁栄とは無関係とも言える。例えば、第二次世界大戦後の民主主義という言葉が輝きを持った時代において、物質的貧困の中で「紙と鉛筆」に注がれた情熱に支えられて花開いたのが、日本における理論物理学、特にその基礎的な分野であるように思う。同時に、安芸の竹原という小さな町においても充分な数の秘書とか事務官の人達に支えられ、思索に没頭できた時代であった。知的な意味においては、最も贅沢な日々を享受



理論物理学研究所長 藤川和男

できた時代である。しかし、日本経済の復興につれて世の中も変わっていった。見直しというかけ声の下に学問も経済活動もすべて同一のレベルで論じられ、効率とか役に立つことが至上と見なされる時代が来たかのように思われることもある。貧しい時代において許された基礎的な研究が、豊かな時代において疎外されるというようなことがあるとすれば、それは皮肉なことであろう。もっとも、現在の日本の繁栄が後世に名を残すとすれば、多分、それは日本人のたくいまれな応用科学とか応用技術における成功についてであると思われるし、そのこと自体は我々の誇りとすべきことと言える。しかし、一つの大学の評価ということになれば、もう少し違った角度からの見方もありうると予想される。その時代々における社会の要望に応えることも重要であるが、時代を超えた学問、知的な情熱をいかに長くくんできたかが問われる日も来ると考えられる。この意味では、わが広島大学も将来構想検討委員会で議論されたように東広島への移転を機に今までも増してバランスのとれた方向を見いだしていくことが希望される。理論研が現在置かれている状況を考える時、いたずらに社会の外的要因の変化を嘆くよりも、自分達自身の過去における努力が充分であったかを反省することも重要であると思っている。また、理論研のような小さな部局が広島大学という大きな組織の中で何らかの意味を持ちうるとすれば、それは大学とは何か、基礎科学とは何かという問いかけの中においてのみであるようにも思われる。この意味でも、理論研としては、基礎科学の研究と大学院教育にますます邁進する覚悟でいる。学内の諸賢兄の一層のご理解とご指導をお願いする次第です。